

学術論文

王逸『楚辞章句』における引詩について

大野圭介

富山大学人文科学研究第77号
2022年8月
抜刷

王逸『楚辭章句』における引詩について

大野 圭介

緒言

『楚辭』の現存する最古の注釈である王逸『楚辭章句』は、その注釈にさまざまな典籍を用いているが、中でも『詩經』の引用が群を抜いて多いことが、宮野直也によって指摘されている¹。また蔣天樞は

王逸之學、本出民間流傳系統、而又得「左右采獲」於各家之書、以爲『楚辭章句』。『章句』雖兼采衆說、除明著引用「淮南子曰」者外、絕不見引及劉安・班固・賈逵之說者、……

王逸の学問も、もともと民間で流伝していたものであったから、諸家の書物から「それぞれ採って解釈を得て」²、『楚辭章句』を作ることができた。『章句』は多くの説を兼ねて採っているとはいっても、明白に『淮南子』曰く」と引用している以外に、劉安（『淮南子』の編者）・班固・賈逵の説を引いているものは見当たらない。……

と指摘する³。このように王逸の引書に明白な偏りがあること、また王逸自らが自分より以前に『楚辭』に章句を施していたと言及する⁴班固や賈逵の説を『楚辭章句』に引かないことは、果たして偶然であろうか。

実は王逸自身の説の中に、これが意図的なものであることを窺える記述がある。宮野氏は『楚辭章句』序の

夫離騷之文、依託五經以立義焉。「帝高陽之苗裔」、則「厥初生民、時惟姜嫄」也。「初秋蘭以為佩」、則「將翱將翔、佩玉瓊琚」也。

王逸『楚辭章句』における引詩について

「夕攬洲之宿莽」、則「易」潜龍勿用也。「駟玉蚪而乘鸞」、則「時乘六龍以御天」也。「就重華而陳詞」、則「尚書」咎繇之謀謨也。「登崑崙而涉流沙」、則「禹貢」之敷土也。

夫れ離騷の文は、五経に依託して以て義を立つ。「帝高陽の苗裔離騷」は、則ち「厥の初めの生民は、時れ惟れ姜嫄（詩経大雅生民）」なり。「秋蘭を紉りて以て佩と為す（離騷）」は、則ち「將翱將翔、佩玉瓊琚（詩経鄭風有女同車）」なり。「夕に洲の宿莽を攬る」、は、則ち「易（乾）」の「潜竜用うる勿れ」なり。「玉蚪を駟として鸞に乗る（離騷）」は、則ち「時に六竜に乗り以て天を御す（周易乾）」なり。「重華に就きて詞を陳べん」は、則ち「尚書（皋陶謨）」の咎繇の謀謨なり。「崑崙に登りて流沙を渉る（離騷）」は、則ち「尚書」禹貢の土を敷ぶるなり。

という部分が、その後引用する班固「離騷序」に

淮南王安叙「離騷傳」、以國風好色而不淫、小雅怨誹而不亂若「離騷」者、可謂兼之。蟬蛻濁穢之中、浮游塵埃之外、嶢然泥而不滓。推此志、雖與日月爭光可也。斯論似過其真。

淮南王安「離騷伝」を叙し、以て国風は好色にして淫せず、小雅は怨誹して乱れず、「離騷」の若き者は、之を兼ねと謂うべし。濁穢の中に蟬蛻し、塵埃の外に浮游し、嶢然（汚れがないさま）として泥にして滓せず（泥の中に沈澱しない）。此の志を推せば、日々と光を争うと雖も可なりと。斯の論は其の真を過ぐるに似たり。

と云うのに反駁すべく、逐一経書を引いて「経義所載」であることを論証したものと指摘する。

班固「離騷序」は、前引の部分に続いて劉安の説が当を失していることを述べてから、博く経書や伝記の本文を採って注解を施したと言ひ、次のように説く。

且君子道窮、命矣。故潜龍不見是而無悶。「關雎」哀周道而不傷。蘧瑗持可懷之智、甯武保如愚之性、咸以全命避害、不受世患。故大雅曰「既明且哲、以保其身。」斯爲貴矣。今若屈原、露才揚己、競乎危國群小之間、以離讒賊。然責數懷王、怨惡椒蘭、愁神苦思、強非其人、忿懟不容、沈江而死、亦貶絜狂狷景行之士。多稱崑崙・冥婚・宓妃・虛無之語、皆非法度之政、經義所載。謂之兼「詩」風雅、而與日月爭光、過矣。

且つ君子の道窮まるは、命なり。故に潜竜こくりゆうに見れずとも悶無し。「閔隄」は周道を哀しみて傷らず。蘧瑗は懐くべきの智を持し、甯武は如愚の性を保ち、威な以て命を全うし害を避け、世の患わざわいを受けず。故に大雅（「烝民」）に曰く「既に明にして且つ哲、以て其の身を保つ」と。斯れ貴しと為す。今屈原の若きは、才を露し己を揚げ、危国群小の間に競い、以て讒賊に離う。然るに懷王を責数し、椒蘭（朝廷）を怨悪し、神を愁わしめ思いに苦しみ、強いて其の人を非とし、忿懣して容れず、江に沈みて死す、亦た絜（潔）にして狂狷景行の士を貶す。多く崑崙・冥婚・宓妃・虚無の語を称し、皆な法度の政ただしき、経義の載する所に非ず。之を『詩』の風雅を兼ね、而も日月と光を争うと謂うは、過てり。

国に道が行われていれば才能を顕して出仕し、道が行われていなければ才を隠しておけると孔子がたたえた蘧瑗（蘧伯玉）⁶や甯武子⁷のような、道が行われない世には身を隠して災いを避けた「君子」を引き合いに出し、さらに『詩経』烝民の「明哲保身」を引いて、屈原はこうした君子の道をわきまえなかつた上に、むやみに人を責めては対立した挙句に自沈して高潔の士をも貶め、崑崙などの経書には見えない荒唐無稽の語を唱えていると、劉安の評価を否定する理由を説明する。しかしその後では

然其文弘博麗雅、爲辭賦宗。後世莫不斟酌其英華、則象其從容。自宋玉・唐勒・景差之徒、漢興、枚乘・司馬相如・劉向・揚雄、騁極文辭、好而悲之、自謂不能及也。雖非明智之器、可謂妙才者也。

然るに其の文は弘博麗雅、辭賦の宗と為す。後世其の英華を斟酌し、其の從容を則象せざるもの莫し。宋玉・唐勒・景差の徒より、漢興りては、枚乘・司馬相如・劉向・揚雄は、文辭を騁極し、好みて之を悲しみ、自ら謂えらく及ぶ能わずと。明智の器に非ずと雖も、妙才と謂うべき者なり。

とも云い、「離騷」のスケールの大きく典麗な文辭は漢に至つても辭賦の宗と仰がれたので、賢明ではなくとも文才の妙はあつたと評価する。屈原と同郷であり、自ら「九思」を作つて『楚辭章句』の末尾に収めるなど、屈原の賢人失志を核とする楚辭文芸の精神を体得していた王逸にとつて、屈原その人を貶めるような班固の評価を承服できないのも無理はない。そうであれば、王逸が『詩経』を大量に引用するのも、班固の説を引かないのも尤もなことである。

では王逸が「離騷」を『詩経』と同等のものだと主張したのは、劉安の「以國風好色而不淫、小雅怨誹而不亂、若「離騷」者、可謂

兼之。」という説に賛同したためなのであろうか。それでは王逸が劉安の説も引かないことに対して説明がつかない。そこで王逸の『詩經』の引用そのものを詳細に見ると、また違った背景も浮かび上がってくる。次章で詳しく検討してみよう。

一、王逸の引詩の傾向

王逸の引詩の各編ごとの頻度は、筆者の集計に拠れば次の通りである。

離騷	13
九歌	10 (東皇太一 2 少司命 1 大司命 2 湘君 2 山鬼 2 国殇 1)
天問	2
九章	10 (惜誦 3 哀郢 2 懷沙 2 悲回風 2)
遠遊	3
卜居	0
漁父	0
九辯	4
招魂	7
大招	5
惜誓	0
招隱士	0
七諫	6 (沈江 1 怨世 2 自悲 1 謬諫 2)

哀時命	2
九懷	3 (陶壅 1 昭世 1 通路 1)
九歎	35 (逢紛 2 離世 2 怨思 3 遠逝 5 惜賢 7 憂苦 7 愍命 2 思古 4 遠遊 3)

漁父・卜居・惜誓・招隱士は『詩經』の引用が皆無である一方、九歎が群を抜いて多いことは一目瞭然である。このうち「漁父」「卜居」は明らかに屈原賦とは異なる趣を持つ作品であり、その注もたとえば「漁父」の冒頭の

屈原既放、 屈原既に放たれ、

(注) 身斥逐也。 身は斥逐せらるるなり。

游於江潭。 江潭に遊ぶ。

(注) 戲水側也。 水の側に戯るるなり。

行吟澤畔、 行くゆく沢畔に吟じ、

(注) 履荆棘也。 荆棘を履むなり。

顔色憔悴。 顔色憔悴す。

(注) 奸黴黑也。 奸くろみて黴黒たるなり。

のように、本文とは別の有韻の四字句になっていて、王逸以前から伝承されていたものであった可能性が小南一郎により指摘される。『漁父』『卜居』は「屈原物語」的な性格を持つもので、屈原作品そのものとは異なり、王逸も『詩經』などの経書を引いて新たな注釈をつけ、「離騷経」のように「経」の価値を持たせる必要があるとは認識していなかったであろう。

「惜誓」の王逸注は『詩經』はもとより他の書物を一切引かず、「言……」とその大意を述べる形式が大半を占める。王逸自身がその序で「惜誓者、不知誰所作也。或曰賈誼、疑不能明也。(惜誓なる者は、誰の作りし所かを知らざるなり。或いは賈誼と曰うも、明らかにする能わざるを疑うなり。)」と云っており、もともと由来のはっきりしない(と王逸が考えた)作品である故に、経書を引いて権

威を高めるには値しないと考えたのかもしれない。

「招隠士」の王逸注は「漁父」「卜居」と同様に、本文とは別の有韻の四字句であり、他の書物を引用しないのも同じである。「招隠士」も道家色が強く、他の屈原賦とは異なる趣を持つ作品で、小南氏も「もし招隠士篇の存在を重視し、それが淮南王安のもとして作られたとする従来の説をひとまず受け入れるならば、これら（「招隠士」「漁父」「卜居」——筆者注）の篇は、淮南王劉安を中心とする集団の中の道家思想の展開と関係を持ちつつ形成されたものだとということになるか」¹⁰と指摘する。また王逸は「招隠士」章句序で

著作篇章、分造辭賦、以類相從、故或稱小山、或稱大山。其義猶詩有小雅・大雅也。

篇章を著作し、分けて辭賦を造り、類を以て相い従う、故に或いは小山と稱し、或いは大山と稱す。其の義は猶お詩に小雅・大雅有るがごときなり。

と云い、王逸がこの篇の作者とする淮南小山の名と作品そのものが既に『詩經』の意を体していると考えていることも、改めて注で『詩經』を引かない理由であるかもしれない。

王逸は『楚辭章句』序で「離騷」について

屈原履忠被譖、憂悲愁思、獨依詩人之義而作離騷、上以諷諫、下以自慰。

屈原忠を履みて譖られ、憂悲愁思し、独り詩人の義に依りて離騷を作り、上は以て諷諫し、下は以て自ら慰む。

と云い、離騷章句序でも

離騷之文、依詩取興、引類譬諭。故善鳥香草、以配忠貞。惡禽臭物、以比讒佞。靈脩美人、以媲於君。

離騷の文は、『詩』に依りて興を取り、類を引きて譬諭す。故に善鳥香草は、以て忠貞に配す。惡禽臭物は、以て讒佞に比す。

靈脩美人は、以て君に媲とす。

と云う。王逸が他の經書より遥かに多く『詩經』を引くのも、「離騷」を『詩經』の精神を體現した、經書と同等の存在として称揚する意図があったことは確かであろう。

では漢代の模倣であり、しかも王逸と時代も比較的近い劉向の「九歎」に注するのにかくも多く『詩經』を引く理由は何であろうか。

少なくとも王逸が「九歎」を「離騷」を超える「経」として称揚しようとしたとは考えられない。この問題を考える手がかりとして、漢代の詩賦やその注釈における『詩経』の引用を見てみよう。

二、後漢初の詩賦と『詩経』

前漢武帝期以前の辞賦には『詩経』を踏まえたとみられる表現はほとんど見られない。戦国期の宋玉「神女賦」(『文選』卷十九)は神女を

皎若明月舒其光、須臾之間、美貌横生、擘兮如華、温乎如瑩。

皎しやうきこと明月の若く其の光を舒べ、須臾の間、美貌横生し、擘かがやくこと華の如く、温かきこと瑩の如し。

と描くが、『文選』李善注は『詩経』陳風・月出「月出皎兮ハ（月出皎し）」と同・鄭風・有女同車「顔如舜華（顔は舜華の如し）」、同・齊風・著「尚之以瓊華ニ乎（之に尚くわうるに瓊華を以てす）」を挙げる。しかしこれらは女性の美貌をいう定型的表現であって、意識的に『詩経』を引いたものではなからう。武帝期の司馬相如の大賦にも、李善が『毛詩』や『韓詩』を引いて注する句はあるが、大半は『詩経』にもその語が見えるという指摘である。

これに対して前漢後期から後漢初の楚辞型辞賦には『詩経』の詩題や句を用いた表現が盛んにみられる。たとえば

揚雄「甘泉賦」儀刑乎于萬國、愛敬盡于祖考。（儀刑は万国に乎まこととされ、愛敬は祖考に尽くさる。）

——大雅・文王「儀刑文王、萬國作孚。（文王に儀刑すれば、万国乎なと作らん。）」

同「羽林賦」王睢關關、鴻鴈嚶嚶。羣娛乎其中、唯唯昆鳴。鳧鷖振鷖、上下砰礚、聲若雷霆。（王睢關關たり、鴻鴈嚶嚶たり。群れて其の中に娛しみ、唯唯として昆ことごとく鳴く。鳧鷖と振鷖は、上下に砰礚ほうかい（ぶつかり合う）し、声は雷霆の若し。）

——周南・閔睢「關關雉鳩（閔閔たる雉鳩）」、小雅・鴻鴈、小雅・伐木「鳥鳴嚶嚶（鳥の鳴くこと嚶嚶たり）」、大雅・鳧鷖、周

頌・振鷺（詩題）

同「長楊賦」於是聖武勃怒、爰整其旅。（是に於いて聖武勃怒し、爰に其の旅を整う。）

——大雅・皇矣「王赫斯怒、爰整其旅。（王赫として斯に怒り、爰に其の旅を整う。）」

班固「西都賦」天人合應、以發皇明、乃眷西顧、寔惟作京。（天人合應し、以て皇明を發せば、乃ち眷として西に顧み、寔に惟れ京と作す。）

——大雅・皇矣「乃眷西顧、此惟與宅。（乃ち眷として西に顧み、此れ惟れ与に宅る。）」

の如くである。班固に至っては、「西都賦」序で「或曰、賦者古詩之流也。（或いは曰く、賦なる者は古詩の流なりと。）」と云い、「東都賦」末尾に『詩経』型の四言の詩を乱辞のように付していることから、『詩経』を意識して引用していることは明白である。

賦だけではなく、後漢の成立とされる「古詩十九首」（『文選』卷二十九）でも李善注は『毛詩』や鄭箋、『韓詩』を多く引いている。その多くは単に『詩経』にその語が見えるという指摘であるが、句単位で踏まえていると思われるものもまま見られる。たとえば其十二

晨風懷苦心 晨風苦心を懷き、

蟋蟀傷局促 蟋蟀局促を傷む。

は、前半の句は秦風・晨風

歛彼晨風 歛（速く飛ぶさま）たる彼の晨風（小型の鷹の一種）、

鬱彼北林 鬱たる彼の北林。

未見君子 未だ君子を見ず、

憂心欽欽 憂心 欽欽たり。

如何如何 如何ぞ如何ぞ、

忘我實多 我を忘ること実に多きは。

の招かれない賢臣の愁い¹³を、後半の句は唐風・蟋蟀

蟋蟀在堂 蟋蟀堂に在り、

歳聿其莫 歳は聿に其れ莫れん。

今我不樂 今我樂しまざれば、

日月其除 日月其れ除らん。

の人生短促の愁いを踏まえている。

このように武帝期を境にして、それより後は辞賦への『詩経』の引用が飛躍的に増加する。その背景には何があつたのであろうか。前漢の武帝期までは、経学と詩賦は別のものであり、学者と宮廷文人の両方を兼ねる人はほとんどなかつた。ところが武帝の儒教一尊政策によつて五経博士が学官に立てられてから、学者と辞賦作家が次第に接近するようになる。前漢末の劉向・劉歆父子や揚雄は学者であるとともに辞賦も手がけており、後漢になると『漢書』を著した学者でありながら辞賦にも「西都賦」で新境地を開いた班固や、尚書の官に就いて政治家として活躍しながら、天文曆算に通じ、辞賦でも『楚辞』の遊行を取り込んだ「思玄賦」のような作品を残した張衡のような人物が現れる¹⁴。こうした人々の手によつて、文学にも経書の語彙や精神が取り込まれていった。

『詩経』の語彙のみならず、その内容形式までも辞賦に取り込もうとした前漢末〜後漢初期の文学も、このような動きの中で成立したものであろう。その動きは王逸が『楚辞章句』に収めた諸作品にも及んでいた。劉向「九歎」では、『詩経』と同じ語彙を用いるだけでなく、その内容を踏まえた典故として用いている表現も見られる。たとえば、

若青蠅之偽質兮、 青蠅の質を偽り、

(王注) 偽、猶變也。青蠅變白使黒、變黒成白、以喻讒佞。『詩』云「營營青蠅」。

偽とは、猶お変のごときなり。青蠅は白を変じて黒ならしめ、黒を変じて白と成す、以て讒佞を喩う。『詩』に云う「營營たる青蠅」と。

晉驪姫之反情。 晋の驪姫の情に反くが若し。

(王注) 言讒人若青蠅變轉其語、以善為惡、若晉驪姬以申生之孝、反為悖逆也。

言うところは讒人青蠅の其の語を變転し、善を以て惡と為すが若く、晋の驪姬の申生の孝を以て、反きて悖逆を為すが若きなり。

「青蠅」は『詩經』小雅・青蠅に

營營青蠅 營營たる青蠅は、

止於樊 樊に止まる。

と云い、詩序は「大夫刺幽王也。(大夫の幽王を刺るなり)」、「毛伝に「興也。營營、往來貌。樊、藩也。(興なり。營營とは、往來の貌。樊とは、藩なり。)、鄭箋に「興者、蠅之為蟲、汗白使黒、汗黒使白、喻佞人變亂善惡也。言止於藩、欲外之、令遠物也。(興なる者は、蠅の虫為るは、白を汗して黒ならしめ、黒を汗して白ならしむ、佞人の善惡を變亂するを喻、うるなり。藩に止まると言うは、之を外にせんと欲し、物を遠ざけしむるなり。)」と云う。劉向は王逸や鄭玄よりは前の時代の人であるが、当時から『詩經』の青蠅が讒佞の喩えとして理解されていたが故に、劉向もこれを用いたのであろう。劉向以前の辭賦でこの典故を用いた例は見られない。王逸注の「變白使黒、變黒成白、以喻讒佞。」と鄭箋の「汗白使黒、汗黒使白、喻佞人變亂善惡也。」とは内容が似通っているが、一方がもう一方を利用したというよりも、劉向の頃からあつた解釈を王逸と鄭玄がともに利用したとみるべきであらう。

そして王逸「九思」に至つて、『詩經』の語彙のみならず句をそのまま借りた表現も現れる。「悼乱」に

鶉鷓兮啾啾、山鵲兮嚶嚶。鴻鷗兮振翅、歸鴈兮于征。

鶉鷓啾啾たり、山鵲嚶嚶たり。鴻鷗翅を振るい、歸鴈于き征く。

と云い、一句目は小雅・出車の「倉庚啾啾(倉庚啾啾たり)」を、二句目は同・伐木の「鳥鳴嚶嚶(鳥の鳴くこと嚶嚶たり)」を、三四句目も小雅・鴻鴈の「鴻鴈于飛、肅肅其羽。之子于征、劬勞于野。(鴻鴈于き飛ぶ、肅肅たる其の羽。之の子于き征き、野に劬勞す。)」を用いている。「離騷」を「依詩人之義而作」と『詩經』に結びつけてその權威を高めようとした王逸は、自身も「詩人の義に依」つた作品を作つて、經書の精神を體現した楚辭文芸を實踐してみせたのである。

三、『楚辞章句』引詩の意図——結語に代えて

では王逸が劉向「九歎」を『詩経』と結びつけようとした意図はどこにあったのか。

『漢書』芸文志・詩賦略には

春秋之後、周道寤壞、聘問歌詠不行於列國、學詩之士逸在布衣、而賢人失志之賦作矣。大儒孫卿及楚臣屈原讒かみに離りて國を憂え、皆な賦を作りて以て風し、咸みな古詩を惻隱するの義有り。風、咸有惻隱古詩之義。

春秋の後、周道寤壞し、聘問・歌詠は列国に行われず、詩を学ぶの士は逸して布衣に在り、而して賢人失志の賦おき作れり。大儒孫卿及び楚臣屈原讒かみに離りて國を憂え、皆な賦を作りて以て風し、咸みな古詩を惻隱するの義有り。

と云い、この説は劉向・劉歆『七略』の説を班固が録したものとされている。ここでは賢人失志の賦は『詩経』を学んだ士が戦国期に四散したことに端を発するとしており、屈原賦の源流も『詩経』にあると云う。

劉向と前後して、辞賦は『詩経』へ接近していく。既述の通り、劉向よりやや後の揚雄が「羽林賦」で『詩経』の詩題や語をきらびやかにちりばめ、班固はさらに大々的に辞賦に『詩経』を取り込むことで、その權威を高めようとした。こうした流れはその後の辞賦作家にも継承され、王逸の頃には既に標準的な技法として定着していた。

一方の楚辞文芸は、屈原あるいはそのイメージを持つ失志の賢人を天界や地の果てに遊行させるといふ枠組みを、辞賦に奪われつつあった。たとえば劉歆が『左伝』をはじめとする古文経を学官に立ててもらおうべく運動して失敗し、朝臣たちの迫害を恐れて自ら五原(現内蒙古自治区)太守に転出した際に作った騷体の賦「遂初賦」は、

昔遂初之顯祿兮、遭閭闔之開通。……惟太階之侈闊兮、機衡為之難運。懼魁杓之前後兮、遂隆集於河濱。遭陽侯之豐沛兮、乘素波以聊辰。得玄武之嘉兆兮、守五原之烽燧。

昔遂初の顯祿、閭闔の開通に遭う(天門が開くように宮廷に入って高位を得た)。……惟れ太階の侈闊にして(三公や外戚が權勢を恣にし、

機衡之が為に連し難し（北斗の如き天子の御意向も思うに任せない）。懼るるは魁杓の前後し（北斗の本体と柄の前後が逆になるように）、遂に降んに河浜に集うを（佞臣どもが洛陽の都に集まってくることを）。陽侯の豊沛なるに遭い（波の神が盛んに波を立てるように激しい誹謗に遭い）、素波に乗りて以て聊戻す（舟が揺れ動いて進まない）。玄武の嘉兆を得て（北方が吉方であること知り）、五原の烽燧を守らん。

と転出の経緯を述べてから、

馳太行之嚴防兮、入天井之喬關。歷岡岑以升降兮、馬龍騰以起據。舞雙駟以優遊兮、濟黎侯之舊居。心滌蕩以慕遠兮、回高都而北征。劇強秦之暴虐兮、弔趙括於長平。好周文之嘉德兮、躬尊賢而下士。

太行の嚴防を馳せ、天井の喬關（太行山の主峰にあった関所）に入る。岡岑を歴て以て升降し、馬は竜のごとく騰りて以て起ち據ぶ。雙駟を舞わしめ以て優遊し、黎侯（周の文王に滅ぼされた殷の諸侯の名）の旧居（現山西省長治市）を済る。心は滌蕩して以て遠き（古代の聖賢）を慕い、高都（天井関のあった県）を回りに北征す。強秦の暴虐を劇しとし、趙括を長平に弔う。周文（周の文王）の嘉徳の、躬ら賢を尊びて士に下るを好みす。

と、五原に向かう途中の古人ゆかりの地でその遺徳をしのぶ様子を描き、

美不必爲偶兮、時有差而不相及。雖韞寶而求買兮、嗟千載其焉合。昔仲尼之淑聖兮、竟隘窮乎蔡陳。彼屈原之貞專兮、卒放沉於湘淵。何方直之難容兮、柳下黜出而三辱。

美は必ずしも偶を為さず、時に差有りて相い及ばず。宝を韞みて買を求むと雖も、嗟千載其れ焉にか合わん。昔仲尼の淑聖なるも、竟に蔡陳に隘窮す。彼の屈原の貞専なるも、卒に湘淵に放沈す。何ぞ方直（方正の士）の容れられ難き、柳下黜出して三たび辱めらるる¹⁶。

と、遊説の途上蔡や陳の地で困窮した孔子や汨羅江に自沈した屈原など、明君に出会えなかつた聖賢を例に挙げながら「立派な人物がうまく理解者に会えるとは限らず、時が合わなければ出会えない」という、『楚辞』離騷や九章でも繰り返したられるテーゼを掲げる。賦はさらに

軼中國之都邑兮、登句注以陵厲。歷雁門而入雲中兮、超絕轍而遠逝。濟臨沃而遙思兮、忽垂意兮邊都。野蕭條以寥廓兮、陵谷錯

以盤紆。飄寂寥以荒吻兮、沙埃起之杳冥。

中国の都邑を軼ぎ、句注（雁門山）に登りて以て陵厲（意気盛んなさま）たり。雁門を歴て雲中に入り、絶轍（車も通らない地）を超えて遠く逝く。臨沃を濟りて遙かに思い、忽ち意を辺都（五原）に垂る。野は蕭条として以て寥廓たり、陵谷は錯りて以て盤紆す（曲がりくねる）。飄は寂寥として以て荒吻（ぼんやりとして見えないさま）たり、沙埃は起ちて杳冥たり。

と、中原を去つて荒涼たる世界へと遊行する場面が続くが、『楚辞』離騷や九章などにうたわれる天上世界への遊行とは異なり、あくまで現実世界の苦難に満ちた旅を描くものである。末尾には『楚辞』と同様の乱辞を付し、「守信保己、比老彭兮。（信を守り己を保ち、老彭に比せん。）」と、「離騷」の乱辞の末尾「吾將從彭咸之所居（吾將に彭咸の居る所に従わん）」や「九章」橘頌の末尾「行比伯夷、置以爲像兮。（行いは伯夷に比す、置きて以て像と為さん。）」を思わせる句で結ぶ。このように『楚辞』に頻出するモチーフや、「佞臣による讒謗↓君主の無理解による放逐↓理解者を求めて天や地の果てへ遊行」というプロットを用いながら、屈原を歌うのではなく己の苦衷を歌うことで、マンネリズムに陥った楚辞文芸の枠組みを抜け出し、その後の班彪「北征賦」や班昭「東征賦」に代表される行旅賦への道を開いた。後漢になると、張衡「思立賦」のように屈原伝説と無関係に遠遊を描いた後で、最後に「不出戸而知天下兮、何必歷遠以劬勞（戸を出でずして天下を知れば、何ぞ必ずしも遠きを歴て以て劬勞せん）」と云い、遠遊そのものを否定してみせるような作品も生まれるに至った。班固が劉安の「以國風好色而不淫、小雅怨誹而不亂、若離騷者、可謂兼之。」を過大評価だと主張したのも、屈原は文才があつても君子の道を体得していないと主張することによって、「離騷」から屈原という強固な桎梏を取り去り、文辞の粹のみを継承して辞賦の発展に資することを目指したのであろう。

王逸はこのような動きに対して、「離騷」に始まる屈原賦だけでなく、劉向「九歎」が『詩経』を盛んに用いていることを強調することによって、班固の評価を否定し、屈原以来の伝統を汲んで今に伝わる楚辞文芸も、『詩経』と、さらに辞賦と同等の、新たな可能性を秘めた文芸であることを強調しようとしたのではなからうか。

しかし現実には、『楚辞章句』は『楚辞』諸作品の注釈として不動の權威を獲得したものの、王逸がめざした楚辞文芸の復興はかなわず、『楚辞章句』の最後に置かれた王逸自身の作品「九思」は、皮肉にも楚辞文芸の掉尾を飾ることとなった。とはいへ賢人失志、遊行、

価値の正邪の顛倒、南方の草木や民俗といった楚辞文芸を構成するモチーフは、他の文学ジャンルに取り込まれる形でその後も生き続けたのであり、その過程を解明することは、今後に残された重要な課題といえよう。

従来から指摘されているように王逸が『楚辞』離騷を「経」にしようとして『楚辞章句』を著したことは、一面では確かに正しい。しかし『楚辞』が畢竟「辞」、即ち文芸であることをも考慮に入れる必要がある。そもそも先秦期には自覚的な文芸は、「詩」と楚辞文芸を除けば「歌」とそれに附随する物語しかなかった。たとえば『論語』微子に録された「楚狂接輿歌」¹⁷、『孟子』離婁上に録された「孺子歌」¹⁸等である。しかし王逸の頃には辞賦が文芸として確立していた。『楚辞』も辞賦の源流である以上、それは「経」であるとともに文芸でもある必要があったのであり、『詩経』はそのことを実証するために最もふさわしいものであった。それ故に王逸は「離騷」を五経の精神に基づくものと主張しながらも、『楚辞章句』で経書の中でも群を抜いて大量に『詩経』を引用し、劉向「九歎」と『詩経』との関係の深さを強調してみせたのである。

附記

本稿は二〇一九年十一月に中国湖南省汨羅市にて開催された「楚辞国際學術研討会暨中国屈原学会第十八届年会」における口頭発表「論王逸引《詩》の予稿をもとに改稿したものである。また本研究はJSPS科研費基盤研究(C)課題番号17K02635(代表:田島花野)の助成を受けたものである。

注

- 1 宮野直也『楚辭章句』引書考、『鹿兒島女子大学研究紀要』一一卷一号、一九九〇年
- 2 「左右采獲」は『漢書』夏侯勝伝の「勝従父子建、字長卿。自師勝及歐陽高、左右采獲。（勝の従父の子建、字は長卿。自ら勝及び歐陽高を師とし、左右より采獲す。）」から引いたもの。
- 3 蔣天枢「論『楚辭章句』」、『楚辭論文集』、陝西人民出版社、一九八二年所収、二二八頁
- 4 「孝章即位、深弘道藝、而班固・賈逵復以所見改易前疑、各作『離騷經章句』。（孝章即位し、深く道芸を弘め、而して班固・賈逵復た見し所を以て前疑を改易し、各おの『離騷經章句』を作る。）」（王逸『楚辭章句』離騷後叙）
- 5 宮野直也、前掲論文、二五九頁
- 6 『論語』衛靈公「君子哉蘧伯玉。邦有道則仕、邦無道則可卷而懷之。（君子なるかな蘧伯玉。邦に道有れば則ち仕え、邦に道無ければ則ち巻いて之を懷にすべし。）」
- 7 『論語』公冶長「邦有道則知、邦無道則愚。（邦に道有れば則ち知、邦に道無ければ則ち愚なり。）」
- 8 『後漢書』文苑伝に王逸は南郡宜城（湖北省）の人と云い、屈原の出身地とされる秭婦（湖北省）とは近い。なお『楚辭章句』の「九思」序に「逸與屈原同土其國、悼傷之情與凡有異。（王逸は屈原と同郷の出身であり、彼を悼む気持ちは通常の人々とは異なるものがあった。）」と云うが、洪興祖補注が既に王逸の子の王延寿の作としており、実際にこの序が王逸の手になるかどうかは疑問視されている。
- 9 小南一郎『楚辭とその注釈者たち』第四章第一節、朋友書店、二〇〇三年
- 10 小南一郎、前掲書、三一六頁
- 11 李善注は「兮」を「矣」に作る。
- 12 李善注は「華」を「登」に作る。
- 13 詩序は「刺康公也。忘穆公之業、始棄其賢臣焉。（康公を刺るなり。穆公の業を忘れ、始めて其の賢臣を棄つ。）」と云い、「賦彼晨風、鬱彼北林。」に毛伝は「先君招賢人、賢人往之、駛疾如晨風之飛入北林。（先君賢人を招き、賢人之に往き、駛疾なること晨風の北林に飛び入るが如し。）」と注する。
- 14 狩野直禎「趙岐考」、『史窓』三八号、一九八〇年、四四〜四五頁
- 15 趙括は戦国時代趙の名將趙奢の子。趙の孝成王四年（前二六〇年）、將軍廉頗に代わって長平（現山西省高平県）の守備に就き、秦軍の進攻を止めようとしたが、兵法書に通じていることを過信して臨機応変の対応ができなかったため大敗し、自らも戦死した。『史記』廉頗藺相如列伝に見える。
- 16 柳下は春秋時代魯の大夫柳下惠。『論語』微子に、柳下惠が士師（廷尉）となつて三回罷免され、人が「他国へ去るべきではないか」と言うと「正直さを守って仕えればどこへ行っても三度は退けられる」と答えたという。「柳下惠爲士師、三黜。人曰「子未可以去乎。」曰「直道而事人、焉往

「而不三黜。枉道而事人、何必去父母之邦。」

17

楚狂接輿歌而過孔子曰「鳳兮鳳兮、何德之衰。往者不可諫、來者猶可追。已而已而、今之從政者殆而。」孔子下、欲與之言。趨而辟之、不得與之言。（楚狂接輿歌いて孔子を過りて曰く「鳳よ鳳よ、何ぞ徳の衰えたる。往者は諫むべからず、來者は猶お追うべし。已みなん已みなん、今の政に従う者は殆し。」と。孔子下り、之と言わんと欲す。趨りて之を辟け、之と言うを得ず。）

18

孟子曰「……有孺子歌曰『滄浪之水清兮、可以濯我纓。滄浪之水濁兮、可以濯我足。』」孔子曰「小子聽之。清斯濯纓、濁斯濯足矣、自取之也。」（孟子曰く「……孺子有り歌いて曰く『滄浪の水清まば、以て我が纓を濯うべし。滄浪の水濁らば、以て我が足を濯うべし』と。孔子曰く『小子之を聽け。清ければ斯に纓を濯われ、濁れば斯に足を濯わる、自ら之を取るなり』と。」なお『楚辭』漁父にも同じ歌が漁父の歌として「世の人々が高潔なら自分も高潔でいればよい。世の人々が汚れていれば自分も汚れればよい」という文脈で引かれている。）